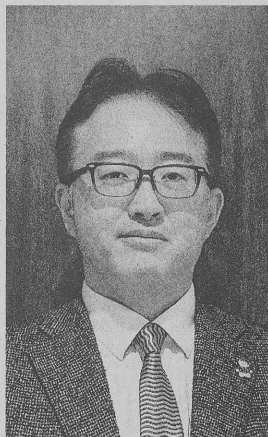


国際協調に戻す説得必要



1978年生まれ。神奈川大学教授などを経て、現職。編著に「世界の岐路をよみとく基礎概念」、著書に「米中対立」など。

さ
は
し
り
よう
佐橋 亮さん

東京大学准教授

トランプ政権の対中政策は多面的な顔を見せてくると思います。「キマイラ」（ライオンの頭とヤギの胴、ヘビの尾を持つギリシャ神話の怪物）と言ってもいいでしょう。

一方に米国第一、米国の経済的利益を最優先に取引を迫る考え方があり、他方に、故レーガン元大統領のような力による平和を考える人たちもいます。中国をめぐる対応は両者のせめぎ

合いとなり、見る角度によ
って見える顔が異なってく
ると思います。

閣僚人事では、保守的な
秩序観の「超タ力派」が目
立ちます。国務長官に指名
されたルビオ上院議員は、
政府以上に中国に厳しい立
法に取り組んできました。

中国に遠慮がありません。
米国第一の考えにして
も、中国経済が強い状態と
いうのは望んでいないわけ
です。中国に対するある種

の敵意があり、中国は油断
はしていません。

台湾でトランプ政権への
不安が出ているとされます
が、台湾の戦略的重要性は
広く理解されていて、台湾
を失うとこの地域の構造が
崩れるということも分かっ
ています。あまり心配はな
いと思います。

ただ、防衛費増などの圧
力が強まれば、台湾で「疑
米論」を引き起こすでしょ
う。また、台湾有事の際の
米国の対応を明言しない
「戦略的あいまい性」の見
直しに動けば、緊張が高ま
る可能性があります。

北朝鮮問題に関しては、
米国まで届く大陸間弾道ミ
サイル（ICBM）の開発
や核実験の停止などと引き
換えに、北朝鮮を実質的な
核保有国として認めてしま

う、ということになりかね
ない。日本は北朝鮮の非核
化を実現する方法を提案し
ていくしかありません。

日本にとっては、米国が
非常に重要な同盟国で、経
済的パートナーであること
は間違いない。米国との同
盟関係をしっかりと見据える
というのがプランAです。
プランBはなく、考えるベ
きは、プランAプラスα
（アルファ）の部分です。

次期政権は保守的な国際
秩序観の一方で安全保障、
経済の支え役という意識は
低くなります。グローバル
サウスの国々などを引きつ
ける力は弱くなります。

日本は同じ国際秩序観を
持った国々との協力を進め
て秩序の構想力、形成力を
高め、米国を少しでもきち
んとした路線に行くように
説得する必要があります。
国際協調に戻していくとい
うのは大変な試みですが、
放置するわけにはいかない
のです。（聞き手・鵜飼啓